



Title	齋宮必簡に就て
Author(s)	白井, 久吉
Citation	懷徳. 1929, 7, p. 72-73
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/88790
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

齋宮必簡に就て

白 井 久 吉

齋宮必簡の事に就ては、寛政四年に出版された諸家人物誌に

齋必簡、本姓は齋宮、自ら脩して齋とす、名は必簡、字は大禮、靜齋と號す、南郭服子に學んで京師に講説す、著述 靜齋文集、孝經傳、音例、初學作文法、靜齋門人に姓は滿生名は晃、字は成章あり、泉州の人、靜齋學論語詁を著す、

とあつて、其後出來た人物誌の様なものは總てこれから轉載したものらしく、これ以上委しく記したものはない、そこで服部南郭の門人であるならば、南郭文集には必ず何か靜齋關係のあるものが載つてある筈と檢べて見たが、一向にそれらしいものが載つてゐない、これは不思議といろ／＼探索して見ると、靜齋文集に「奉南郭先生書」といふ一篇がある、それによると不都合な事があつて南郭から破門せられ

たやうである、而して其の後和泉の岸和田か佐野邊に居住したらしい、靜齋文集には岸和田、佐野邊に關する詩文が澤山載つてゐるので判る、其の著孝經傳、孝經外傳には、廣陵齋叔子大禮輯、南泉、唐宗師大卿跋とあるから、是の書は岸和田邊に居つた時のものらしい、さて靜齋は其の後京都へ出て、菴園と言ふ塾を開いたらしい、其の著神道解、及び孝經外傳にも菴園とあるしまゝ菴園詩話古樂苑抄といふ寫本も残つてゐる、私 持て居る神道解は寫本であるが、これは版になつた様でもあり、ない様でもあり、今の處判明しない、これによると夫子少時明霞先生に學び、後南郭先生に遊ぶとあるから、初めは宇野鼎の門人であつた様である、其の他尙著述があるであらうが、寡聞なる私は何等知る所がない、生れは藝州であることは判つてゐるが、没年及

び墓所が明かでないのは甚だ遺憾である、或は服部南郭に破門せられたといふことが靜齋の一身上に累をなし、一向人に見向かれなかつたものではあるまいかとも思はれる、因に孝經外傳に南泉唐宗師大卿

とあるのは、門人滿生の事であるまいか、其の著靜齋學論語話には大鹿先生著とあり、大鹿は或は其の號か敢て識者の示教を乞ふ。

支那の祠廟

竹内峰治

一日上海縣城内を見物すべく F、K の外に通譯の同文書院學生を連れて、太馬路の廣場パークスの銅像下で支那名物の黄包車（ハカシバオチヨ）を呼ぶ、たちまち二十人程寄りたかつた汗臭い俥夫の喧しいこと、云つたらない先に賃金を定めて置かぬといかぬ支那の乗物のこと四人の要車を決めてからでも、自分の俥にのつてくれぬと黄な齒をむいてわめき、はては唾を吐きかけるのには、勢ひステッキを振上げざるを得なかつた。租界外である城内支那街は、危害を加へられても持つて行きかたも無いとて、女子供は勿論、馴れぬ外

人の一人歩きは警めてあるが、洋館の建てつまつてコンクリートでかためた租界街よりも、粗野にして支那の匂が溢れてゐる城内は、物を求めても安價に得られるなどよりして、觀光客には好ましい巷街である。

北門街から這入ると、何處の國の街でも盛り場の中には、神佛を祠つたのを見るやうに、支那各洲には城隍廟といふのがさうしたところに祠つてある。是は支那の氏神様で、明の洪武年代に天下の州縣には必ずこれを祠るやうにと詔あつて以來、何處にも此